

歌あり語りありの貴重な全幕公演。北欧の物語世界に酔いしれた。

◆ グリーク「ペール・ギュント」2.15 sun

去る2月に行われたOEKの第316回定期公演「フィルハーモニー・シリーズ」ノルウェーの作曲家グリークが、イブセンの物語を作曲した劇音楽「ペール・ギュント」全5幕が上演された。

組曲版は広く親しまれるが、全曲を通しての公演は、全国でもきわめて珍しいという。とりわけ『朝』『山の魔王の宮殿にて』などは、誰も耳にしたことのある名曲だが、全幕を通して聴くと、これまでの曲のイメージが変わるかもしれない。舞台上のスクリーンには日本語字幕が映され、たとえ作品を知らなくても、ストーリーと音楽を重ねながらその世界に浸ることができる。

ちなみに、ペール・ギュントは物語の主演の名だ。ノルウェーの農家に生まれ、自由奔放に生きる彼は、他人の結婚式に乗り込み、元恋人の花嫁を奪うもすぐに捨て、今度は放浪の旅へ。富と快楽に溺れる日々、巨万の富を獲得したかと思えば、全財産を失うという、まさに波乱に満ちた人生を送る。歳月が流れ、年老いたペールは、再び帰国しようと

するも船が難破。命からがら故郷にたどり着くが、彼を待ちわびた恋人ソルヴェイクの子守唄を聞きながら永遠の眠りにつく――。

なんとも破天荒なペールの冒険人生を、美しい管弦楽とともに独唱と合唱で情感たっぷり盛り上げてゆくのも、全曲版ならではの魅力であろう。注目のソリストは、天沼裕子氏から指導を受けた、若手実力派の声楽家たちだ。ペール役の高橋洋介さん(テノール)やソルヴェイク役の立川清子さん(ソプラノ)など、のびやかでみずみずしい歌声が響き渡る。特筆すべきは、怪しげな雰囲気醸す、風李一成さんの朗読。その独特の語り口が、物語の世界に見事に融け込んでいた。

気鋭の指揮者クリスチャン・ヤルヴィ氏をはじめ、錚々たる面々の中、『オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団』のパフォーマンスが輝いた。団員は、公演のためにオーディションで選ばれた32名の優れた歌手たちだ。

「OEKという世界レベルの音楽を共有できる素晴

らしい機会。最高の合唱を目指したい」と、公演前に意気込みを語ってくれたのは、合唱指揮者の犀川裕紀さん。「『ペール・ギュント』が合唱付きであることを知らない方も多いはず」と言う氏による聴きどころの中でも、「ドブレ王の広間」の場面で、攻撃的な台詞を繰り返す力強い歌声は圧巻もの。また、終盤のオーケストラなしの「精霊降誕祭の歌」では、鍛え抜かれた合唱団の実力が存分に発揮されたといえよう。

合唱団長を務める綿谷敏彦さんは、メンバーをまとめながら練習を積み重ねてきた。「ほとんどのメンバーは、本業の傍ら、活動しています。限られた時間の中、各自が責任を持って音をつくり上げてきました。歌詞の一つひとつを自分なりに解釈して、思いを込めて歌うので、その表現力が伝われば」。

クリスチャン・ヤルヴィ氏の巧みな構成力に導かれ、管弦楽の旋律と歌と語りが渾然一体になった壮大な劇世界。観客は一気に引き込まれ、心が揺さぶられる演奏会となった。



第316回定期公演の様子。エストニア出身、音楽一家に育った指揮者クリスチャン・ヤルヴィ氏をはじめ、8名の若手ソリストらと共演を果たした、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団は、迫力ある歌声を響かせた。

オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団とは

北陸三県よりオーディションで選ばれたメンバーで構成され、1993年2月にオーケストラ・アンサンブル金沢第30回定期公演「フォーレ：レクイエム」でデビュー。オーケストラ・アンサンブル金沢の定期公演の出演のほか、「魔笛」「蝶々夫人」「椿姫」「トスカ」などのオペラ公演にも出演。合唱団員は毎年オーディションによって選出されている。



メンバー全員で奏でるハーモニーに喜びを感じます。歌詞の裏に潜む意味や思いを、豊かな表現力で伝えてゆきたいです。

OEKと共演できるという機会に恵まれるOEK合唱団。人生最高のひとときのために、これからも力を尽くします！



「オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団」の練習風景。北陸三県よりオーディションで選ばれたメンバーで構成され、1993年にデビュー。今回は金沢市出身の犀川裕紀さんが合唱指揮を務めた。



団長 綿谷敏彦さん

合唱指揮者 犀川裕紀さん